

岩手県立大学で定年を迎えるにあたって

小川晃子

着任した日

岩手県立大学が開学した1998（平成10）年4月1日の朝、北松園の宿舎から始発バスで出勤しました。学部棟にはまだ人の気配がなく、それまで21年過ごした喧噪にまみれた東京の会社員生活からは想像もできない静かな幕開けでした。そして次の日の朝、カーテンを開けるとそこには白い世界が。岩手でのこれから的生活に適応していくのか、不安が一気に高まったことを覚えています。

福祉情報でいただいたご縁

そもそもなぜ私が43歳で民間企業から大学教員に転職し、岩手に単身赴任することになったのか、不思議に思われる方も多いと思います。シンクタンクの研究員だった私は、36歳で厚生省（当時）立である日本社会事業大学の修士課程に入学しました。会社員と院生の二足の草鞋をはくことを会社が許した理由は、当時社会福祉分野が計画行政の時代に入り、コンサルティング業務の市場が拡がっていたからです。修士論文の指導者は当学部の初代学部長である高澤武司先生でした。修士課程修了後にある市の計画策定について高澤先生と打ち合わせをするために研究室を訪問した私は、県立大学整備室の職員と出会いました。その方から、西澤潤一先生が初代学長であることや実学実践を目指す大学として、社会福祉分野でも情報化に取り組む研究者を探していると話しかけられました。実は当時は、自治省（現在は総務省）系列のシンクタンクと共に、岩手県東和町（現在は花巻市）の県立病院移築に伴う医療・保健・福祉の情報連携システムの構想づくりを担当していました。その実績をお伝えしたことが縁の始まりです。民間シンクタンクの仕事は、地域住民に役立つ成果を残したいと思っていても、時間・金銭両面での制約に従うしかありません。これに忸怩たる思いを抱えていた私は、岩手で福祉情報の実践的な取り組みができることに夢をもって着任しました。

学位取得までの苦闘

修士課程を終えたとはいへ論文実績がないに等しい私は、講師からのスタートとなりました。それでもよいと思って着任したのですが、先輩の先生がたからは論文を書き学位を取得するよう注意を受けました。課程博士と論文博士の違いも知らなかつた未熟な私はその後悪戦苦闘し、学位を取得するまで実に8年もかかつ

てしまいました。学部の専攻が心理学であった私は、高齢者の発達を支援するICT環境をテーマに、先輩教員の菊池章夫先生のご指導をいただき、学位論文を書きました。菊池先生とのご縁がなければ、私は途中で職を辞していたかもしれません。昨年亡くなられた菊池先生には学恩を謝すしかありません。

フィールドワークから生まれたお元気発信

学位取得がままならない年月においても、元来フィールドワーク好きな私は、機会があれば県内の市町村でかけていました。そのなかで、私が東和町で構想到了の実際にはうまく稼働せずにいた医療・保健・福祉連携システムが、川井村（現在は宮古市）で「ゆいとりシステム」として運営されていることをしります。このシステムは、医師や保健師・ヘルパーさんたちがチームをつくり、広大な村で必要な機能を整理し、独力で開発をしたものです。その成功要因を学びたいと川井村に何度も通ううちに、過疎化・高齢化する中山間地域で暮らす高齢者の生活実態にふれました。そして、川井村社会福祉協議会の事務局長だった大洞敦子氏と話をさせていただくなかで2003（平成15）年に生まれたのが「お元気発信」です。

「お元気発信」は、家庭にある固定電話機（川井村ではレモード電話機）を使い、高齢者が毎朝自ら「1. 元気」「2. 少し元気」「3. 悪い」「4. 話したい」の番号を発信する能動的な安否確認システムです。見守りセンター（一般的には社会福祉協議会）が発信状況を確認し、未発信者に対して電話かけや訪問をすることにより、24時間に1回確実な安否確認をします。突然死を防ぐことはできませんが、ご遺体が数日を経て発見される孤立死は防ぐことができます。「人に迷惑をかけたくない」と思っている高齢者にとって、自分から発信しておけば誰にも迷惑をかけない方法であり、継続的に見守ってもらえることへの安心感がわくこと、そして月300円の電話代だけという低コストであることを多くの高齢者が評価し利用してくださることになりました。川井村でのシステムは、ニーズ調査や高齢者のリテラシー支援は社会福祉学部の教員・学生が、システム開発はソフトウェア情報学部船生豊先生の講座の教員と学生が担い、まさに岩手県立大学の学部を超えた地域連携として実装したものです。2007（平成19）年には、日本経済新聞社地域情報化大賞において、日本経済新聞社賞を受賞し、この年の学長賞もいただき

ました。これが契機となり、2009（平成21）年からは岩手県・岩手県社会福祉協議会と連携して新たなシステムを開発し、翌年から岩手県社会福祉協議会の事業となりました。県内の市町村社会福祉協議会が見守りセンターとなる形で、現在までに1,100名の高齢者が利用しています。

東日本大震災の復興支援研究

お元気発信が県内で本格稼働を始めようとした矢先に東日本大震災が発災しました。県内の市町村社会福祉協議会は災害ボランティア対応や被災者支援業務に追われたため、お元気発信の導入は進みませんでした。一方で、仮設住宅での孤立死が社会問題となるなど被災地での見守りの必要性は増しています。そこで、やむにやまれぬ思いで始めたのが被災地における復興支援研究でした。被災後の混乱のなかで、私たちのプロジェクトを受け入れてくださる地域はなかなかみつかりませんでしたが、宮古市田老地区・大槌町・釜石市鵜住居地区と平田地区が受け入れてくださいました。被災地は社会資源に限りがあります。仮設住宅のサポートセンター・クリニック、社会福祉施設等、その地域ごとに実現可能な見守りセンターを設定し、お元気発信を基盤としつつ、血圧測定伝送システムや電力使用センサー・服薬支援見守り等のICT活用見守りを加えました。また、ヤマト運輸による買い物支援「まごころ宅急便」との連携もしました。苦肉の策で動いた結果が、人とICTの見守りを重ね、地域で一体化していく「重層的見守り」の効果を実証する形となりました。この研究成果は盛岡赤十字病院の鎌田弘之先生等の日本遠隔医療学会見守り分科会の仲間や、NTTドコモ復興支援室社員であった方々と共に、AI/IoT時代への見守りへと現在も歩を進めているところです。

ICTを活用した生活支援型コミュニティづくり

話は前後しますが、東日本大震災発災前の2010(平成22)年9月には、JST(科学技術振興機構)のRISTEX(社会技術研究開発センター)の「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」領域で「ICTを活用した生活支援型コミュニティづくり」が、社会問題の解決に資する具体的な技術や手法などについてその実証まで行うカテゴリーⅡとして採択されました。宮古短期大学部の植田先生、社会福祉学部の狩野先生・宮城先生、看護学部の千田先生等にも共同研究者となっていました。滝沢市・旧川井村・盛岡市の松園地区と桜木地区をフィールドとして3年間取り組んだ社会実験の成果は、お元気発信と生活支援を連動したサービス

やコミュニティづくりの組織として今も残っています。JSTの領域ではさらに他のプロジェクトと連携して、福島県浪江町から二本松への避難者及び高知県梼原町の住民に、お元気発信の導入を行いました。JSTから大きな研究費(3年間でほぼ1億)をいただき取り組んだアクションリサーチは、今後に資する社会技術を生み出し実装することができました。

研究成果としての展開

お元気発信については、小学校5年生の社会科の教科書(東京書籍)に2014(平成27)年から5年間掲載されました。「お元気発信」は商標も登録(5706283)しています。

また、青森県とともに開発した認知症を予見するお元気発信の仕組みでは、特許(第6435482号)を取得することもできました。

こうした取り組みを通して、多くの機関や共同研究者と出会えました。そのつながりから、お元気発信も今ではタブレット版・スマホ版・AIスピーカー版と進展してきました。今年度は、岩泉町で全世帯に導入されている「ぴーちゃんねっと」のお元気発信もできました。また、コミュニケーションロボットや介護ロボットを活用するための実証実験なども手掛け、新たな開発へと展開しています。

自分らしく生ききるための環境づくりへ

私事になりますが、9年前から岩手に移り住み私の研究生活を支えてくれていた夫が2017(平成29)年にアルツハイマー型認知症と診断を受けました。なってしまったからには環境を整えていくしかありません。この2年半、認知症であることを隠さない夫と共に、様々な関係者と出会うことができました。また、ICT活用により重度障害児・者の社会参加を拡げている島根大学の伊藤史人先生等との出会いもあり、認知症になっても障害があってもその人らしく生ききることができる環境づくりへと、私の関心や活動領域が拡がりました。

こうした活動ができたのは、いわて未来づくり機構で医療・福祉連携作業部会長の役割を与えていただいたことや、大学の戦略的研究プロジェクトに位置付けていただいたおかげです。

これからのこと

最後に退職後の展望について述べておきます。あと1~2年は研究活動を継続します。岩手県における見守りと生活支援型コミュニティづくりの地域協働研究は地域連携棟のプロジェクト室で作業をさせていただくことになりそうです。

AIやIoT活用の見守り等についてはフリーの研究者として共同研究者や民間企業等と連携できれば有難いでです。これまでフィールドで多くの高齢者に協力をいただき、数度の社会実験に取り組んできました。この関係性は若手研究者や企業等の研究のラボとしても提供できるものと考えています。

こうした活動を続ける間に、これまで執筆できずにいた論文や書籍をまとめ、研究生活を終うつもりです。

これから徐々に活動を抜けしていくのは、当事者活動です。認知症バリアフリー社会づくりやICT活用見守りについて、自分や家族の老いを体験しながら、それを問題解決の仕組みづくりへつなげていければ嬉しいです。また、生活者としてこれまで犠牲にしてきた部分を整え、自分らしく生ききりたいと願っています。

御礼とお願い

22年にわたる大学教員生活を終えるにあたって、ご支援をいただいた大勢の方に深く感謝申し上げます。指導してくださった先輩教員、優秀な同僚教員、誠実で意欲的な学部生・院生、そして外部で連携してくださった多くの研究者や行政・社協・企業を含めた地域の関与者の皆さんに、厚く御礼申し上げます。お世話になった大勢の方々の個々のお名前を出して感謝すべきところですが、紙数に限りがありできないことをご容赦ください。

末筆ながら、この22年間お世話になった岩手県立大学と社会福祉学部、そして岩手の地域のますますのご発展を祈念いたします。

私は「一人の百歩より、百人の一步」という言葉が好きです。これからも大勢の方々とのつながりのなかでいかしていただければ幸いです。